

ごん吉くんしポート〜南吉もやま話〜

第26回

妻を支えた画家と南吉

新美南吉記念館では、7月15日から市制80周年記念「鈴木靖将絵本原画展」命と愛、そして祈り〜(第二期は9月10日まで)を開催しています。日本画家の鈴木靖将さんは、平成25年の南吉生誕百年を記念した絵本シリーズ10冊を手がけ、どの本も命への愛しみに満ちています。靖将さんと南吉、2人の世界を連載で紹介していきます。(以下、人物の敬称略)

鈴木靖将は、昭和19年、滋賀県大津市に生まれました。昭和43年、同じ画家で5歳年上の三橋節子と結婚します。互いを尊敬し合い、2人の子どもにも恵まれましたが、そんな幸せな日々は突然暗転します。節子が右肩鎖骨腫瘍、つまり骨の癌と診断され、右腕切断の手術を余儀なくされたのです。死の恐怖。成功しても、画家として何より大切な利き腕を失う絶望。しかし、靖

将から「右手が無くなっても、俺の手と合せて二本あるじゃないか」と励まされた節子は、筆を左手に持ち替え、手術後わずか18日で再び絵を描き出します。昭和50年、節子は35歳でこの世を去りますが、手術から亡くなるまでの2年間で、精力的に創作をしました。地元近江の伝説を題材にとり、愛と死をテーマにした作品ばかりで、手術前よりはるかに深い画境に達していました。

節子が亡くなった時、2人の子どもは5歳と3歳でした。まだ幼い我が子を遺して逝かねばならない彼女の悲しみはいかばかりだったでしょう。南吉の母りゑもまた4歳の南吉をおいて亡くなりました。母としてのりゑの思いは、節子と変わらなかつたでしょう。また、若くして死と向き合いながら数々の傑作を創作したという点では、結核に侵され、29歳で亡くなった南吉自身もそ



うでした。さらに南吉の初恋の女性、節子と同じ骨肉腫に罹り、左腕を失くしています。その報せは南吉に衝撃を与えました。このように節子と南吉の間には、不思議なほど多くの共通点があります。その節子を受し、病と闘いながらの創作を支えた靖将が、南吉の童話と向き合った時、南吉が作品に込めた、人が生きていくことの悲しみ、すべての生き物を慈しむことから生まれる命への賛美、そして、その命を守る平和への祈りに対して、自然に響き合うことができたのでしょう。



▲長男を抱く節子と靖将(昭和45年)

お中元にもぜひ!! 半田市厳選カタログギフト「蔵の風情を醸すまち」

半田の魅力が“ギュッ”と詰まったカタログギフトができました。ふるさと半田を思うみなさんの温かさが伝わる贈答品として、また今までのプレゼントやお中元・お歳暮とは違う特別な贈答品として“おすすめの逸品”です。ぜひお買い求めください。

■掲載商品 45点

(例) カブトビール、総本家田中屋の生せんべい、松華堂の銘菓詰め合わせ、ブリオのソーセージセット、黒牛の里(知多牛ハンバーグ)ペア食事券、MIM入館ペア券・お土産セットプラン

■販売価格 4,600円(税抜き)

■販売場所 (株)マイルーム(半田市岩滑西町2-33-1)

※マイルーム特設サイト「蔵の風情を醸すまち」

(<http://handa-catalog.com>)からもご注文いただけます。



■問合わせ

- ・企画課 ☎84-0605
- ・(株)マイルーム ☎23-3399 (受付: 10時~19時)

本事業は、国の地方創生推進交付金を活用して、市がカタログギフトの作製費を補助しています。